

歯科における管理栄養士関与の有用性に関する研究

Utility study of management dietician participation in dentistry

伊藤 陽子

YOKO Itoh

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 博士後期課程

キーワード：歯科，管理栄養士，有用性

Key words : Dental, Management dietician, Utility

1. 研究目的

高齢化を始めとする社会環境の変化により，歯科の診療内容も診療所完結型から院外へ積極的に出ていく地域連携型へと変化しつつある．中でも在宅訪問歯科診療は，積極的に在宅医療に貢献しようとする歯科医師により都市部を中心に広がりつつある．在宅訪問歯科診療の対象患者の多くが摂食嚥下障害を抱えており，適切な食事形態の提案は，患者のQOLや栄養状態の維持・改善に欠かせない．このように，近年の歯科診療においては管理栄養士の知識やスキルの活かせる場面が多くあり，近年，歯科での管理栄養士の雇用も増えつつある．しかし現状では歯科で管理栄養士が栄養管理関連業務を行っても診療報酬は得られず，管理栄養士の雇用は栄養に理解のある歯科医師の思いに支えられているのが実情である．そこで筆者は，一昨年度，歯科医師と栄養士との協働実態調査を行い，現状における協働の実態および歯科医師が管理栄養士との協働において期待している知識やスキルを明らかにした．その結果，協働はわずか10.5%の歯科医師しか経験しておらず，栄養士・管理栄養士の専門性に対する認識は低いことが明らかとなった．一方で協働経験のある歯科医師は協働効果を十分に認識しており，その効果に期待していた．昨年度は，歯科外来受診患者の栄養関連のニーズ調査を行い，歯科外来における管理栄養士の関与に対する潜在的，顕在的ニーズを明らかにした．歯科外来受診患者には，無自覚のオーラルフレイルの疑いのある患者が存在することや，個別栄養食事指導および健康教室のニーズが高いことを示した．今年度は，歯科に勤務する管理栄養士の業務調査および管理栄養士による

訪問栄養食事指導のサービスを受けている患者からの主観的評価を調査した．歯科に勤務する管理栄養士における栄養関連業務を詳細に集計すると同時に，サービスの受け手である患者はその業務をどう評価しているのかを自由記述により情報収集した．自由記述で得られた文章をテキストマイニングの手法を用いて分析を行い，管理栄養士の関与に対する患者または介護者の評価を客観的に示すことでその有用性を検討した．

2. 研究実施内容

研究1:歯科に勤務する管理栄養士の業務調査

1) 方法

歯科に勤務する管理栄養士2名について，令和元年3月～5月の延べ6ヶ月間の業務を累積集計した．

業務内容は，「訪問関連業務：訪問診療のために行う準備等の業務」，「アシスト業務：同行する歯科医師のアシスタントとして行う業務」，「栄養管理関連業務：管理栄養士としての業務」の3つのカテゴリーに分類した．

日々の業務をそれぞれのカテゴリーごと項目別に記録し，調査期間終了後に分類に間違いが無いよう，情報のすり合わせ作業を行った．それまでになかった業務を行った際は新たに項目を追加し，1回も行われていなかった業務は削除した．

2) 倫理的配慮

業務内容を記録する際，業務に関する患者の特定ができないよう配慮した．

なお，本調査は大妻女子大学生命科学研究倫理

表 1 歯科医院勤務管理栄養士の業務内容

業務内容／実施回数・実施率	実施総数 (N) = 在宅 : 265 施設 : 93												
	訪問関連業務			アシスト業務				栄養管理関連業務					
	訪問の連絡調整	カルテ準備・資料作成	カルテ整理等	歯科治療アシスト	外部評価(嚥下機能評価)アシスト	嚥下内視鏡アシスト	多職種連携(カンファレンス参加等)	栄養状態の評価	必要栄養量の算出	食事摂取量の評価	栄養状態改善のための食品・調理の助言	嚥下機能に応じた食形態の提案	調理指導
在宅	265	265	264	169	67	32	228	75	37	45	29	30	44
(%)	100	100	99.6	63.8	25.3	12.1	86.0	28.3	14.0	17.0	10.9	11.3	16.6
施設	93	93	93	25	60	34	86	55	8	11	2	14	5
(%)	100	100	100	26.9	64.5	36.6	92.5	59.1	8.6	11.8	2.2	15.2	5.4
合計	358	358	357	194	127	66	314	130	45	56	31	44	49
(%)	100	100	99.7	54.2	35.5	18.4	87.7	36.3	12.6	15.6	8.7	12.3	13.7
	50.4%			18.2%				31.4%					

審査委員会の承認を得て実施した。(受付番号 30-018-1)

3) 結果

業務内容を表 1 に示す。業務内容は全て歯科医師の在宅訪問歯科診療への同行であり、実施場所は在宅および介護施設訪問であった。

栄養管理関連業務以外に、訪問に伴う連絡調整やカルテ準備などの訪問関連業務はほぼ管理栄養士が行っており、その他に歯科医師のアシスト業務も行っていた。栄養管理関連業務は、在宅、施設ともに「多職種連携」、「栄養状態評価」が上位を占め、次いで在宅は「食事摂取量の評価」、「調理指導」、「必要栄養量の算出」、施設は「嚥下機能に応じた食形態の提案」、「食事摂取量の評価」、「必要栄養量の算出」の順に多かった。

4) 考察

本調査は、歯科医院における栄養管理関連業務およびその周辺業務の調査であり、外来受付業務や事務作業を含めた勤務時間中の全ての業務内容を調査したものではない。

本調査期間には、院内における栄養指導や講師などの業務は行われなかったため、全てが歯科医師の在宅訪問歯科診療への同行業務であった。2つの歯科医院とも、認定栄養ケアステーションを設置しているため、地域での健康教育講演や栄養指導業務など、栄養ケアステーションへの依頼業務も行われるが、本研究の期間中には行われなかった。

また、2つの歯科医院とも居宅療養管理指導事業所の指定を受けているため、介護保険での在宅訪問栄養食事指導料の算定が可能である。そのためは訪問関連業務は必ず発生する業務であるため、訪問関連業務が 50%を占めていたことも理解でき、歯科医師のアシスト業務が 2割に満たなかったことから、管理栄養士としての業務が行えていることが示唆された。

栄養管理関連業務は、在宅、施設に共通して「多職種連携」に関わる業務が 90%前後と高率であった。手塚¹⁾は、訪問栄養食事指導を行う際の多職種連携で気を付けることとして、地域連携における情報の共有化を挙げている。管理栄養士は、訪問回数が月に 2回までしか認められていないため、次

の訪問までの間に対象者の状態や介護方針に変化があっても現状の把握ができずに取り残されることがある。そのため、他の職種が対象者とのように関わっているのかを把握することは大変重要なことであり、注意すべきポイントであると述べている。本研究においても在宅、施設ともに高率で多職種連携業務を行っていたのは、退院時カンファレンスや地域担当者会議への出席によって情報の共有化を図るためであった。

それ以外の業務は、在宅においては介護者への指導が中心となるため、「食事摂取量の評価」「調理指導」の割合が高かった。一方、施設においては、調理スタッフはいるが摂食嚥下機能を評価できる専門職が勤務していないことが多いため「嚥下機能に応じた食形態の提案」の割合が高かった。介護保険施設には管理栄養士が勤務しているが、グループホームなどの規模の小さな介護施設や、介護保険施設ではない老人施設などは、管理栄養士・栄養士が勤務していない場合も多い。一昨年の調査で歯科医師が管理栄養士に求めた知識やスキルが、訪問栄養食事指導でも同様に求められていることが示唆された。

5) 研究の限界

調査対象者が2名であり、業務内容が限られてしまった。また、月や時期により業務内容は異なるが、調査期間中の業務内容を示すに留まった。

研究2：在宅訪問栄養食事指導サービス受給者による管理栄養士の業務評価

1) 方法

令和元年3月～5月に、在宅訪問歯科診療の同行訪問先の患者家族および介護施設スタッフ31名に無記名自記式調査票を直接配布した（配布率8%）。回収は郵送で行い、24名から回答を得た（回収率77%）。調査内容は、「Q1：管理栄養士の業務評価（選択）」、「Q2：管理栄養士の業務に関して良かったと思っていること（自由記述）」、「Q3：管理栄養士との関わりに対する意見（自由記述）」とした。

Q1は単純集計を行った。Q2、Q3は自由記載分析（テキストマイニング）により頻出語を抽出した。これらの分析には、テキストマイニングの分析ソフトであるKHCorder（フリーソフト）を用いた。

2) 倫理的配慮

研究目的、方法および研究への参加協力の自由意志と拒否権について、書面にて説明を行った。また、調査票の回収は強制せず、個人が特定できないよう配慮した。

なお、本調査は大妻女子大学生命科学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。（受付番号30-018-1）

3) 結果

「Q1：管理栄養士の業務評価」の結果を図1に示す。管理栄養士の栄養管理関連業務に対するサービス受給者からの評価は、22名（94%）がともよかったと評価していた。

「Q2：これまで栄養士に相談したり指導を受けたりしたことや、やってもらってよかったと感じていること」における頻出語を表2に示す。出現回数の多い順には「アドバイス」「食事」「摂食」（11回）「教える」（10回）「栄養」（8回）「指導」「食べる」（7回）であった。語と語の共起関係から共起ネットワークを作成した（図2）。共起ネットワークは、「アドバイス」、「栄養、食べる」「指導」を中心とした3つのネットワークが形成された。

「Q3：管理栄養士との関わりに対する意見（自由記述）」における頻出語を表3に示す。出現回数の多い順に「管理栄養士」（12回）「感謝」「指導」「歯科」（7回）「栄養」「食べる」「食事」6回）であった。語と語の共起関係から共起ネットワークを作成した（図3）。共起ネットワークは、「歯科、栄養」、「管理栄養士、感謝、食べる」、「良い、健康、教える」から成る3つのネットワークが形成された。

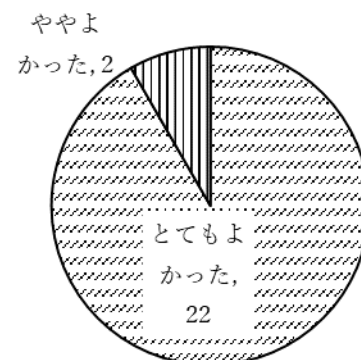


図1 管理栄養士の業務評価

表2 「管理栄養士にやってもらってよかったこと」 頻出語 (4回以上)

出現回数	言葉
11回	アドバイス 食事 摂食
10回	教える
8回	栄養
7回	指導 食べる
6回	カロリー 栄養補助食品
5回	食品
4回	とろみ剤 家族 体重 方法 嚥下

表3 「管理栄養士との関わりに対する意見」 頻出語 (4回以上)

出現回数	言葉
12回	管理栄養士
7回	感謝 指導 歯科
6回	栄養 食べる 食事
5回	できる 相談 調理
4回	介護 患者 考える

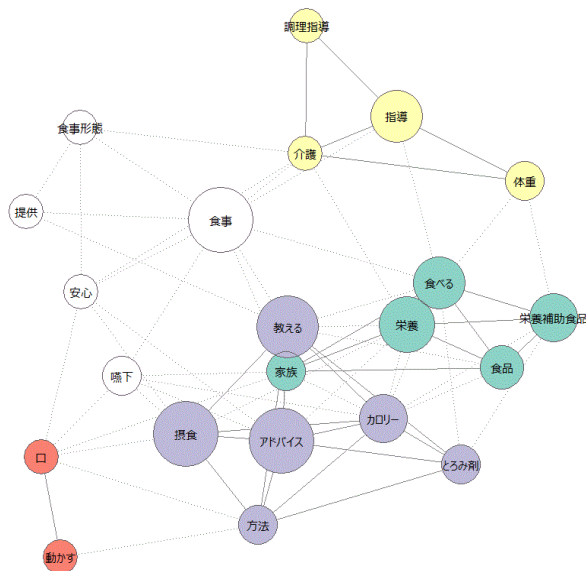


図2 Q2: 管理栄養士にやってもらってよかったと思うこと

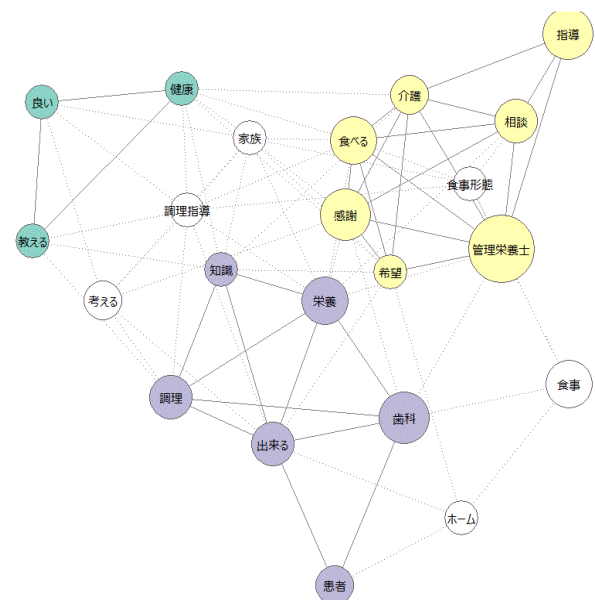


図3 Q3: 管理栄養士の関わりに対する意見

4) 考察

図2の共起ネットワークおよび頻出語の前後の文章からは、管理栄養士の業務に対し「食事や栄養の摂取および摂食機能や食品選択に関して栄養士から助言や指導を受けられること」「体重の増減や介護上必要な調理指導を行ってもらえること」を評価していることが明らかとなった。

図3の共起ネットワークおよび頻出語の前後の文章からは、栄養士との関わりに対し「管理栄養士に介護や食べることについて相談できたり指導を受けたりできることで希望を持てたり感謝して

いる」、「歯科で栄養や調理について知識や指導を受けられる」、「健康について教えてもらって良かったと感じている」ことが示唆された。

歯科と栄養の連携による栄養学的な効果はすでに先行研究^{2,3)}からも明らかとなっているが、栄養士が居宅または施設を訪問することで直接接する機会を得て、患者または介護者のQOLにも寄与していることが示唆された。

5) 研究の限界

研究1と同時にを行った研究であったため、同様の限界として2名の管理栄養士での調査であったことが挙げられる。訪問先も限られることから、幅広い情報の収集が行えなかった。

また、訪問先の患者の身体状態が深刻であったり、介護者の負担が大きいなど調査協力が得難く調査票の配布が困難な状況にある場合ことも多かったことから、配布率は8%と低くなってしまった。事前にそのような状況を想定し、調査期間を長期に設けるなどの工夫が必要であった。

【引用文献】

- 1) 手塚波子, 小川滋彦: クリニックにおける訪問栄養食事指導 管理栄養士の立場から. 静脈経腸栄養 24(4): 927-930. 2009
- 2) 本川佳子: 高齢期の栄養ケア—歯科と栄養の連携—. 老年歯学 34(1): 81-85. 2019
- 3) 菊谷武, 米山武義, 他: 口腔機能訓練と食支援が高齢者の栄養改善に与える効果. 老年歯学 20: 208-213. 2005

3. まとめと今後の課題

一昨年度に実施した「歯科医師と栄養士の協働実態調査」および昨年度に実施した「歯科外来受診患者における栄養関連ニーズ調査」に続き、本年は在宅訪問歯科診療における管理栄養士の有用性を検討した。

歯科医師と栄養士の協働実態調査において、管理栄養士との協働経験を有する歯科医師は10.5%にとどまったが、一方で管理栄養士との協働を前向きにとらえる歯科医師が多かった。また、協働経験を有する歯科医師は、管理栄養士の専門性を理解し協働効果を高く評価していた。

歯科医院外来受診患者の栄養関連ニーズは、オーラルフレイルの患者の存在が明らかとなり、潜在的ニーズが示唆された。歯科治療と並行した栄養指導の希望や歯科医院を会場とした健康教室への参加希望も高く、歯科医院外来受診患者の潜在

的、顕在的栄養関連ニーズが示唆された。

在宅訪問歯科診療対象者は管理栄養士の業務を評価しており、栄養状態の維持・向上だけでなく、QOLの向上にも寄与していることが示唆された。

これらの研究結果に共通して管理栄養士が評価され、求められていたスキルは「栄養状態の評価・判定および摂食嚥下機能評価ができること」であり、これにより「患者の栄養状態、QOLが改善すること」が期待されていた。歯科医師と管理栄養士との協働においては、このスキルを修得することが重要であることが示唆された。

どの研究からも歯科において管理栄養士が協働することは高く評価されていたにも拘らず、現状では協働は進んでいない。今以上に協働を促進するためには、協働するための方法の周知や歯科医師、管理栄養士の専門性の相互理解を進めるとともに、協働効果を明らかにし、管理栄養士の存在意義を示していくことが重要である。

4. この助成による発表論文等

①雑誌論文

- [1] 伊藤陽子, 小松知子, 李昌一, 岩瀬靖彦: 歯科医師と栄養士との協働意識に対する実態調査—摂食嚥下障害者に対する連携の充実を目指して—. 日本障害者歯科学会誌 40(2): 200-208. 2019

②学会発表 (口演発表)

- [1] 伊藤陽子, 服部美喜子, 彦坂陽子, 岩瀬靖彦: 歯科外来受診患者における栄養関連ニーズ調査. 第25回日本摂食嚥下リハビリテーション学会学術大会 (新潟 2019年9月6日)